

## はじめに

ローマ人への手紙9章を4回にかけて学んできました。9章のテーマは「イスラエルの選び」でした。パウロは、イスラエルが多くの特権を与えられているにもかかわらず、多くが福音を拒否していることに苦悩し祈っていました。これは同胞を思うパウロの個人的な願いです。しかし、イスラエルの歴史をさかのぼってみると、神の主権によって選ばれた、レムナントという少数の真の信仰者だけ救われてきたのでした。また神はイスラエルだけではなく異邦人の中にも真の信仰者を選び、召しだしておられます。パウロはこのメシアニック・ジューと異邦人クリスチャンのこのことを「あわれみの器」と呼びました。この少数の真の信仰者「あわれみの器」だけが救われてきたという事実は、決して神の不正でも、不公平でもありません。もし神が、本当に公正に人類を裁かれたとすれば、ソドムとゴモラのように誰一人救われるものはないからです。3章で学んだように「義人はいない、一人もいない」のです。しかし神は愛をもって耐え忍び、「あわれみの器」を選び、召しだしてくださったのです。

9章の議論は神の視点からの内容でした。しかし、神の選びだけを強調し過ぎると、バランスを崩してしまいます。バランスを取るために、今日の箇所では人間の視点から、イスラエルが福音を拒否した理由が解説されます。つまり、人間の側の責任が問題にされるということです。私たちは、神の主権と人間の責任の関係をバランスよく理解する必要があります。聖書は、世の始まる前から神のご計画が確かである事実と、人間は神の前に自由意志が与えられた責任のある存在であるという事実の両面を教えているからです

### 1. 律法による義と信仰による義

**9:30 それでは、どのように言うべきでしょうか。義を追い求めなかった異邦人が義を、すなわち、信仰による義を得ました。**

異邦人は、ユダヤ人のように律法を持ってはいませんでしたので、自分たちの生活を導く義の基準がありませんでした。そのため、異邦人には、モーセの律法を行うことによって義を得るという考え方はありませんでした。異邦人がイスラエル人よりも先に救われた

というのは、皮肉な現実です。しかしこれも神のご計画の中にあることでした。人は恵みにより、信仰によって救われます。それ以外のものは、不要であり、福音の純粹さを破壊してしまう危険性があります。神が私たち罪人を受け入れてくださる土台は、「律法の行い」ではありません。神は、ご自身と罪人の間にキリストという橋を架け、救いの道を用意してくださいました。神が用意された救いの道である福音を信仰によって受け入れることが、義認の唯一の方法です。

多くの人たちが、キリストの福音を拒否します。その理由のひとつが、救いの必要性を感じていないからです。人は、自らの罪の深さを認識しない限り、神の方法を受け入れることはありません。しかし、自分が罪人であることを認める人にとっては、福音のメッセージはまさに「グッド・ニュース」です。私たちは恵みにより、信仰によって救われました。

**9:31 しかし、イスラエルは、義の律法を追い求めていたのに、その律法に到達しませんでした。**

しかし ユダヤ人の場合は、異邦人とは対照的でした。イスラエルは、義の律法を追い求めていた律法に熱心な民です。イエスの時代のユダヤ教は、モーセの律法を発展させた結果、拡大解釈や曲解による多数の「口伝律法」を持つようになっていました。イエスは、パリサイ派が教える口伝律法の偽善性と闘われました。この手紙を書いているパウロもまた、パリサイ人で律法に熱心でした。彼は、イスラエルがいかに律法の義を追求することに熱心であるか身をもって知っていました。しかし、彼らはそれだけ熱心に「律法の義」を追求しながら、律法が要求する義には到達しませんでした。律法を守って義を得ようとするには、律法を完全に守る必要があります。

**ヤコブ 2:10 律法全体を守っても、一つの点で過ちを犯すなら、その人はすべてについて責任を問われるからです。**

そこには、大きな解がありました。律法は、最初から救いのために与えられていたわけではないのです。

## 2. つまづきの石

**9:32 なぜでしょうか。信仰によってではなく、行いによるかのように追い求めたからです。彼らは、つまづきの石につまづいたのです。**

「なぜでしょうか」とは、なぜユダヤ人は、律法が教える義に到達しなかったのか、という意味です。その理由は、「**信仰によってではなく、行いによるかのように追い求めたからです**」とあります。ユダヤ人には、義認に関する誤解があったのです。いつの時代でも、救いは、恵みと信仰によります。信仰によることこそ、神の御心に適っていたのです。人間の罪深い現実と、神のあわれみの絶対性を本当に理解していたならば、ただ信仰によることも理解できたはずでした。イスラエルは神の民でありながら、基本的な知識において大きな間違いを犯し、行いによって義とされると勘違いしてしまったことは、致命的な誤りでした。

さらにパウロはこう言います。**彼らは、つまずきの石につまずいたのです。**

**9:33 「見よ、わたしはシオンに、つまずきの石、妨げの岩を置く。この方に信頼する者は失望させられることがない」と書いてあるとおりです。**

「**つまずきの石**」とは、人々をつまずかせる原因となるものです。「**つまずきの石**」と「**妨げの岩**」は、ともにキリストのことです。イスラエル人は、このキリストにつまずいたのです。このことは、イザヤ書に預言されていたことでした。

**イザヤ 8:14** そうすれば、主が聖所となる。しかし、イスラエルの二つの家にとっては**妨げの石、つまずきの岩**となり、エルサレムの住民には**畏**となり、**落とし穴**となる。

「**つまずきの岩**」とは、キリストのことです。ここにあるイメージは、ぶつかったならこちらが破壊される巨大な岩です。「**妨げの石**」もまたキリストのことです。「**妨げ**」は、ギリシア語で「スカンダロン」で、英語のスキャンダル（醜聞）の語源です。イスラエル人は、この岩につまづくだけでなく、気分を害し、立腹し、傷つくのです。神の民であるイスラエルは、律法に自己流のやり方で熱心になることによって、律法の本質であるイエス・キリストには盲目になり、気分を害し、立腹し、ついにはキリストを十字架につけてしまったのです

**イザヤ 28:16** 見よ、わたしはシオンに一つの石を礎として据える。これは**試みを経た石、堅く据えられた礎の、尊い要石**。これに信頼する者は慌てふためくことがない。

ここでは、「**試みを経た石**」、「**堅く据えられた礎の、尊い要石**」などの呼称が出てきます。これは、建物を建てる時に最初に置く礎石のことです。イエスをメシアとして信じる者は、失望させられることはありません。以上のことは、信じるイスラエル人と不信仰なイスラエル人の対比です。私たちもまた、「**尊い要石**」であるキリストに**信頼**を置きました。それゆえ、失望させられることはありません。

### 3. 律法の終わりでありゴール

**10:1 兄弟たちよ。私の心の願い、彼らのために神にささげる祈りは、彼らの救いです。**

これは、9：1と同じ内容でイスラエルが民族的に救われてほしいという強いパウロの個人的願いです。神の選びの教理を真剣に教えたパウロが、同時に、イスラエル人の救いのために熱心に祈っています。パウロのこの姿勢から私たちは学ぶことができます。誰が救われるかは、神だけが存じである神秘です。私たちにはそれが分からないのですから、パウロのように熱心に祈りと伝道とに励まなければなりません。

**10:2 私は、彼らが神に対して熱心であることを証しますが、その熱心は知識に基づくものではありません。**

彼らは、神についての知識を持っているのです。ところが、彼らのその熱心さが、パウロの痛みの原因となっています。その熱心は知識に基づくものではありません。とパウロは言います。新共同訳では、「この熱心さは、正しい認識に基づくものではありません」と訳しています。ここでの「知識」は知性によって得られる「グノーシス」という言葉ではなく、神の啓示によって得られる「エピグノーシス」（完全な知識）です。つまりイスラエル人は、神に関する知識を持ってはいたが、キリストにあって神を知ることはなかった、という意味です。

**10:3 彼らは神の義を知らずに、自らの義を立てようとして、神の義に従わなかったのです。**

「神の義」とは、パウロが1～8章で論じてきた内容です。神は、恵みと信仰によって、人を義としてくださるのです。ユダヤ人は、自らの義を立てようとしてしました。それは、律法を行うことによる義です。自らの義を立てることは、必然的に神の義を拒否することになります。

**10:4 律法が目指すものはキリストです。それで、義は信じる者すべてに与えられるのです。**

神の律法が目指すものと訳された言葉は終わりと訳すこともできます。ユダヤ人は、この4節の真理について無知でした。この節は、キリスト、律法、信仰、義の関係を端的に表現する重要な一節です。

他の訳を見てみると「キリストは、すべて信じる者に義を得させるために、律法の終りとなられたのである」（口語訳）「キリストは律法の目標であります、信じる者すべてに義をもたらすために」（新共同訳）。

ここでは、「テロス」というギリシア語をどう訳すかが問題となります。この言葉には、「終わり」という意味があります。その場合は、「律法の終わり（成就）」となります。「目標（ゴール）」という意味もあります。その場合は、「律法の目標」となります。両方の意味があると考えると、4節の訳は「キリストは、律法の要求をすべて満たし、それを終わらせた。また、律法が与えられた目的は、人をキリストに導くためである」となります。ユダヤ人たちは、その両方の意味を見失ってしまいました。

おわりに

### 聖書が求める正しさ

パウロが用いる「義」という言葉は、理解するのが難しい言葉です。「信仰による義」という場合は、神との正しい関係と理解できますが、「神の義」や「自らの義」の場合には単純に「正しさ」という意味です。しかし問題はその場合の「正しさ」とは何かということです。イエスが語られたブドウ園の例え話（マタイ 20：1～16）は、雇い主が労働者たちに労働時間に関係なく、同じ報酬を払うという話でした。この場合、雇い主の行為は正しいと言えるでしょうか。客観的には不公平に見えるかもしれませんが、雇い主自身は何も不当なことはしていません。また、死を前にしたイエスに女性が高価な香油を注いだ時、弟子たちは正義感から、そのお金で貧しい人に施すべきだと主張しましたが、イエスはそれを良いこととして肯定されました。（マタイ 26：6～13）

聖書が求める正しさとは、客観的な正しさよりも人格的關係における正しさであり、それは相手を愛し憐れむ心のことです。義の律法と呼ばれる旧約聖書は、そのような神の正しさ、神の心の表れに他なりません。律法の中心が神と隣人への愛と言われるのはそのためです。ところが、かつてのパウロも多くのユダヤ人たちも「神の心」に自分を合わせるよりもむしろ「自らの義」（または自分たちユダヤ民族の正当性）をアピールするために律法を用いたのです（ピリピ 3：9 参照）ここには決定的な誤りがありました。そんな彼らが神の愛と憐れみの極致であるキリストがわからないのも当然ともいえます。信仰者はあくまでも神の心に自分を合わせるものであって、神を自分の心に合わせるものではありません。ところが、私たちは皆自己中心的ですから、しばしばこの過ちを犯します。

Ⅱ歴代 16:9 【主】はその御目をもって全地を隅々まで見渡し、その心をご自分と全く一つになっている人々に御力を現してくださるのです。

クリスチャンであっても自分の立場を正当化しようとして、聖書や神を引き合いに出そうとする。そのような熱心は正しい神知識に基づくものではありません。

#### クリスチャンには律法は不要か

神の律法が目指すものと訳された言葉は終わりと訳すこともできます。では、イエスキリストというゴールに至ったクリスチャンにとって、律法はもはや不要であり「終わり」となったのでしょうか。答えはイエスでありノーです。

神の心を知るに至ったクリスチャンは、もはや石に刻まれた律法を必要としません。聖霊によって心に記されたキリストの律法を生きるようになるからです。（ローマ 8:4、第2コリント 3:3）

しかし、いまだ足元のおぼつかない私たちは、絶えず自分の道筋とゴールを確認し続けるために「私の足のともしび、私の道の光」である旧約聖書の御言葉にも照らされつつ、歩まなければなりません。大切なのは神の心と、ゴールであるキリストを、見失わないことです。どんなに熱心に聖書を学び、充実した信仰生活を送っていても、自分勝手な道を走っているレースは自己満足にすぎません。しかし、目指しているゴールさえ正しければ、どんなに遅い歩みであったとしても、その道は間違っただけではありません。必ずゴールにたどり着きます。

ヘブル 12:2 信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。